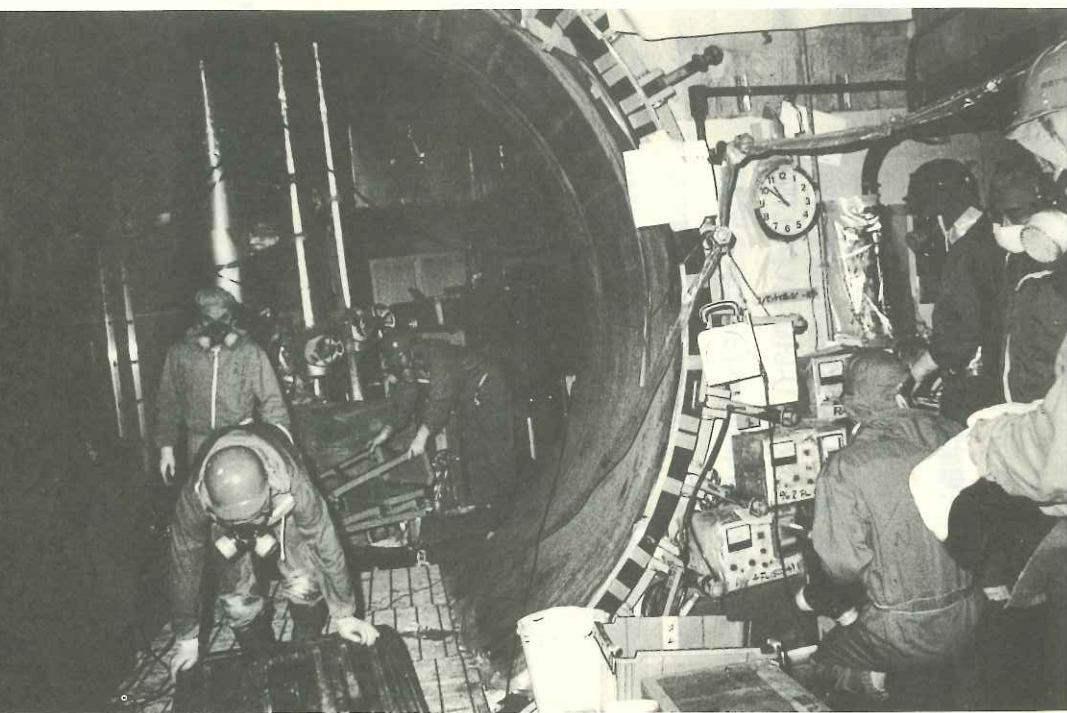


いのちを奪う 原発



定期点検中の炉心部入口で作業する被曝労働者
(写真提供：樋口健二氏)

いのちを奪う原発

「豊かさのいけにえ」長田浩昭……………2
 —原発を認めてきた時代と私たち—

日本の原子力発電所一覧……………19

原子力の虚構と実像 藤田祐幸……………20

「ヒバク」その悲しみの時代 藤井学昭……………34
 —東海村臨界被曝事故から見えてきたこと—

インタビュ― 未来ある若者たちへ 嶋橋美智子……………47
 —白血病で死んだ息子が残してくれたもの—

インタビュ― 事実を言い出さなければ、河本一也……………62
 伝えなければ 中島哲演……………62

「ヒバク—原爆被爆、原発被曝」その差別の構造 村田三郎……………88

インタビュ― 能登半島の小さな町で 塚本真如……………99
 起こっていること

原発から見えてくるもの 玉光順正……………110

原発関係の主な年表……………116

参考図書一覧……………118

裏表紙絵:工藤美彌子
 ムラサキツクサは青紫色の花を咲かせる。放射能が漏れていることがはっきりわかる方法としてこの花が観測される。花は放射能の影響を敏感に受け、体内で突然変異を起こして、花びらにピンク色の斑点が出るという。

「豊かさのいけにえ」

—原発を認めてきた時代と私たち—

長田浩昭

他化自在天という現代社会

仏教は、人間の迷いの生の現実を地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道という概念で表現をした。「天」も迷いの生の現実である。その「天」のひとつに「他化自在天」という「天」が明らかにされている。「他化自在天」とは「他の所化を奪って自らの物になす」と表現されているように、他の者が作り育てた物を奪い自らのものとなし、奪われた側に眼も向けず、自らが得たことだけを喜び、さらに「有頂天」に浸る。まさに、物質的な「豊かさ」にあふれた、私たちの生きる現代社会を言い当てた言葉ではなからうか。「天」は「豊かさ」を獲得した側には心地よい世界であるが、問題はその「豊かさ」を獲得するために奪ったものが何であるのかということと、奪われた側

の姿が見えないということであろう。そのことを見つめることなしに、「天」を迷いと知ることもないのだと、仏教は教えているように思う。

原子力発電所は電力を得るためのシステムであることは誰もが知っている。そして、その電力を得ることによって、私たちの便利で豊かな生活が成り立っていることは、否定しようがない。だからこそ、「事故さえ起こさなければ」という考えが推進の論理になり、一方「一度事故が起これば、大変なことになる」という考えが一般的に反対の論理となってきた。確かに、一〇〇万キロワット級の原発が一年間運転されれば、原子炉内に広島原爆一千発分の死の灰が生まれ、放射能が垂れ流されている現実を知れば知るほど、「一度事故が起これば…」という不安は立地地区住民にとって非常に大きい問題である。しかしながら、原発による電力を消費する側にいる多くの人々が、「事故さえ起こさなければ」問題はない、というところにこそ、原発というものの本質がある。

賛成反対を越えて、「事故さえ起こさなければ…」「一度事故が起これば…」ということを守ろうとしてきた、原発の電力によって得られた私たちの豊かな生活が、何を奪うことによって成り立ってきたのか、そのことをまず知るところからしか六道を一步踏み出すという仏道の歩みは生まれてはこないだろう。

原発のある「風景」

福井県若狭わかさにある小さな民宿。目の前の静かな海には、北陸から遠く離れた都会の人々が日常生活を離れ、避暑を楽しむための高級なヨットが浮かんでいる。その民宿の仏壇の上には、二十代で亡くなった息子さんの遺影がかざられてあった。その若者が、その港の先端にある原子力発電所の中で、放射線を浴びながら労働をし、被曝ひばくによって亡くなったという現実を、その海で避暑を楽しむ都会の人々は知ろうはずもない。

その若者の死の現実を私に教えてくれたのは、その民宿の近くにある寺の住職であった。「私は住職をして十数年来、癌がんと白血病はっけつびょう以外の葬式をしたことはありません」という言葉が、初めて会った時の彼の自己紹介であった。原発の中で被曝し続けた村の人々を見つめ、原発の問題を「いのちの問題だ」と現地の人々の声を代弁し続けた彼もまた、末期癌におかされ、一九九四年にこの世を去った。そしてその棺の前で、夜中まで泣き崩れていたのは、若者を亡くしたその民宿のお父さんであった。そんな「風景」が、原発を抱える地域に横たわっていた。

その住職が亡くなって数カ月後の夏、この国は初めて原発労働者の死を労働災害として認めた。その若者の名は嶋橋伸之さん、二十九歳であった。彼は静岡県にある浜

岡原発の中で、八年間にわたって働き続けた。病名は「慢性骨髄性白血病まんせいこつずいせい」、被曝し続けた結果であった。彼の母である嶋橋美智子さんは、「一生懸命仕事をした者が、何の落ち度もないのに、死ななければならない仕事などというものが、あつていいのではありませんか」と言う。この言葉は、被曝することそのことが労働であるという、被曝労働の本質をまさに言い当てている。つまり原発は、ある一定の人数の労働者がいのちを削り、死んでいくことを前提にして成り立っているのである。

原子力政策を国策とした私たちの国には、五十二基もの原子力発電所が建設され、そして事故や定期検査の時などはもちろんのこと、通常運転の際にも、被曝を余儀なくされる大量の労働者が必要とされ続けている。あの広島・長崎によって被爆者手帳を交付されている人々は現在二十九万人であるが、この国に原発が稼動し始めて三十五年、原発の中で被曝した労働者の数は、もうすでに三十五万人を数える。世界で唯一の被爆国日本の中で増え続ける、おびただしい数の被曝者たち。彼らの死は、その氷山のほんの一角である。そんな事実をひた隠しにしながら、「核の平和利用」という国策の原子力政策は推進されてきた。

そして一九九九年九月三十日、東海村のウラン燃料加工施設JCOで臨界事故りんかいが発生した。日本の原子力政策における最大の事故であり、その被曝は住民にまで拡散し

た。旧科学技術庁の発表では、亡くなった大内さん、篠原さんをはじめとしたJCO職員、東海村住民の六百六十七人の被曝者を出したとされている。

東海村住民でその恐怖を体験した藤井学昭氏（真宗大谷派願船寺副住職）は、事故の本質を「中性子爆弾を住民に浴びせた、無差別殺人だ」と表現し、次のようなメッセージを全国に発信した。

原子力産業に従事する作業員をはじめ近隣の住民に、どれだけ被曝者を作り続け
たら済むのでしょうか。私たちが守るべきものは何でしょうか。この前の戦争末期、
国体護持の名目でどれだけの人々が殺されていったのか。日本のエネルギー政策
（原子力）を守るためにどれだけのが殺されなければならないのでしょうか。私たちが
守るべき生活とは何でしょうか。（中略）東海村住民にとって原子力とは、国家による
無差別殺人であるとはつきりと見えてまいりました。

中性子爆弾とは、街の建物を破壊することなく、生命だけを破壊するという最新鋭の核兵器である。東海村のと真ん中に突如として現れた中性子爆弾は、この「核の平和利用」という国の原子力政策の産物である。JCOの事故は、はからずも国の原子力政策が「核の平和利用」という言葉でカムフラージュしてみても、原爆と原子力開発は同じであったことを、住民の被曝というかたちで露呈させてしまったと言える。

「いのち」を奪うことによってしか成り立たない「豊かさ」、そんなものを私は選んだこともなければ、望んだこともない。しかし、これが原発によって支えられた「豊かな」社会に生きる私たちの現実である。

共にあることを失っていく姿

能登半島の最先端に関西電力・中部電力が原発の新規立地を進める、人口二万人の珠洲市がある。一九八九年四月、原発誘致を争点として推進派一人、反対派二人が立候補した市長選挙は、現職の推進派が勝ったものの、原発を支持した票が過半数を獲得した。誰もが「これで原発の推進はない」と思っていたその一カ月後、関西電力が立地予定地・高屋町での立地可能性調査を強行する。それ以降、住民による高屋町での阻止行動、市役所での座り込みが四十日間にわたって続けられることになる。

その渦中であって、市役所に座り込みを続ける反対派住民の一人が、「日本の原発は安全です」と繰り返すばかりの市の助役に質問をした。「あなたは、原発労働者の実態を知っているのか？」という問いに対して、その助役は「そんな危険な仕事は、珠洲市民以外の者にやってもらうので、どうぞご心配なく」と発言した。その時、「それでも人間か！」と叫んだ珠洲市の多くの人々が騒然となる中で、何が問われているのか

わからないという困惑した助役の姿があった。

彼がどれほど被曝労働の具体的現実を知っていたかは定かではない。しかし、市民から被曝労働者の実態を厳しく問いかけられた時、「危険な仕事」と十分察知し得たであろうし、だからこそ「市民以外の人に」ということで納得してもらえない応答だと判断したに違いない。人間としての責任が問われたひとつの出来事ではあるが、原発を推進する人々に共通して表れる姿であるように思う。

同じ頃、立地予定地の高屋町における阻止行動では、調査のためにやって来た関西電力の作業員と住民が対峙たいじしている中で、「どうして関西の電力会社が、能登半島のような先端まで来て、発電所を作らなければならないのか？」と尋ねた老婆に、その作業員は悪意のないソフトな笑顔で真剣に対応した。それは、「おばあちゃん、人の多い大阪に原発を作って、もしものことがあったら大変なことになるのがわかるやろ」というものであった。「珠洲に住んでいる人間をモノのように扱って、それでも人間か！」と烈火のごとく怒った老婆の前で、やはり何に怒っているのか見当もつかず、ただキヨトンとしている関西からやって来た企業の若い作業員の姿があった。

さらには、珠洲市の原発誘致の実態を伝えたNHKの特集番組「原発立地はこうして進む」(一九九〇年五月二十三日放映)の中で、予定地の買収を進める関西電力の立地

部員は、自分たちの仕事の内容を「私らは物を買ったり、土地を買ったりするんじゃない。私らは「人の心」を買うんだ」とテレビカメラの前で堂々と語った。人間に對するこれほどの侮辱おとしやくがあるのか。人間を人間として見ない限り、自らの人間性を失っていくという「いのちの道理」に気づかないことにこそ「天」の内実があり、そこに原発というものの本質が現れたのだと思う。

原発立地には三つの条件が必要と地元では説明されている。それは、強固な地盤、広大な敷地、住民合意である。しかし、それらは何度繰り返しPRされても、その背景に開発という問題が当然のこととして済ませてきた、過疎地(辺境)の切り棄すてとそこに生きる人間への蔑視べっしが横たわっている。

『雑宝蔵経』という經典には、共命鳥ぐみちどりという鳥の物語がある。共命鳥とは、体が一つで頭と心が二つある鳥である。その一方の頭がエサを独占しながら言い争い、その原因を「お前が従わないからだ」と、もう一方の頭をなじるのであった。そして、なじられた頭が「お前なんか殺してやる」と興奮し、体が一つしかないことを忘れ、毒草を食べ、結局両方が死んでいくという物語である。先原の原発を推進する人々の姿はまさに、死んでいった共命鳥の物語であり、その共命鳥が極楽浄土に生きていると説く『阿弥陀経』は、共にあることを失い原発を認めていくような生き方のその先には、

極楽浄土はないと示唆しているように思う。

開発という虚構

原発は過疎脱却、開発、発展ということを表向きの看板にして過疎地に押し寄せる。しかし、そもそも「開発」とは何なのだろうか。「開発」というのは、本来ならば地域の発展になるというイメージを持つが、「開発」は逆に地域とそこに住む人々を開発貧乏にし、開発難民にするということを見出した人として、六ヶ所村元村長・寺下力三郎氏の姿を紹介したい。

青森県六ヶ所村は、国策であるプルトニウムサイクルの中核として全国の原因から核廃棄物が集積され、再処理を行うと予定されている土地であるが、その始まりは一九六九年、「むつ小川原開発」という国家プロジェクトとしての巨大開発であった。その国家プロジェクトである巨大開発に、現職の村長として彼は「否」を言った。

一九七三年七月十二日、衆議院建設委員会公聴会で彼は反対意見として巨大開発の本質を次のように述べている。

地震とか津波のように村を襲った巨大開発は、村ぐるみ人ぐるみ飲み込もうとしている。私どもは開発難民にならぬため必死の努力をしている。それは生きるた

めの努力であり、生きる権利の主張である。村長として住民の暮らしと命を守ることは行政、政治の原点であるが、これを無視して、ゴリ押しの進められているのが、巨大開発である。六ヶ所村で生きる農漁民にとって、土地と水は生活の基盤だが、工業開発も土地と水を最大限に収奪しなければ成立しない。企業の利潤追求の原則は、土地と水を最大限に収奪しなければ貫徹しない。そういう工業開発の本質が歴然としている。かつての大陸侵略と手口が似ている。(取意)

彼は戦時中、朝鮮半島に渡り、朝鮮窒素(水保病を引き起こした新日本窒素の前身)に採用されている。その朝鮮半島で現地の人々を難民にし、その人々の犠牲のうえに日本の発展繁栄を構築する国策の実態を経験していた。そして「こんなところにいると大変なことになる」と思い、一年で帰国し群馬県の山間部で養蚕教師として働くことになる。そこで知ったのが、足尾銅毒事件と田中正造の闘いであったという。彼はそれらの経験によって巨大プロジェクトが来ると、なぜ自分たちが貧乏になるのかという仕組み(構造)を熟知していたのである。

この国の開発は、常にその主体が大企業と政府官僚、そして一部の地方有力者に主体があり、決して地方自治体にはなかった。その結果、地方の開発を目的にしながら、実際は辺境をさらに辺境化し、中央に資本を蓄積し、中央を温存させてきた。戦前

「大陸侵略」という方向をとった日本の近代化は敗戦によって終わらず、戦後は国内に「収奪可能」の地を求めて、戦前と同じ構造で、「開発という侵略」「地方の植民地化」を国家的に敢行したものが巨大開発であったと言える。

そういう開発の虚構を、彼は現職の村長として見抜き、「否」と言った希有の政治家であり、その背景に戦前の国策・侵略戦争に対する加害者としての痛みと、人間としての責任性を持っていた。

巨大開発、核燃サイクルに反対の姿勢を貫いた彼は、一九九五年四月二十六日、フランスから高レベル放射性廃棄物が六ヶ所村に搬入された時、凍りつくような雨に打たれながら、「終生つきまとう人間の業を村が引き受けてしまった」と寂しそうにボツリともらしたという。

未来を失ったもの—阿闍世なるもの

その六ヶ所村に集積されようとする核廃棄物とは、原発から生み出され、人間には処理することのできない「死の灰」である。その中のプルトニウムを考えれば、その寿命が終わるまで、二十万年（注1）を越える管理をしなければならぬ。そんな責任を誰が負えるというのか。私たちは、それを六ヶ所村と未来の子孫に押し付けたので

ある。

浄土とは、いのちの帰すべき平等の世界を表現したものであって、それは、「ある」「ない」という問題の概念ではない。帰すべきところを明らかにすることによって、現在の生を問いつける原理を獲得し、未来を方向づけたのである。さらに浄土は、去来（過去—未来—現在）という時間概念の中で、仏と仏が念じあう世界として表されている。つまり、現在は過去と未来によって限定されていると説かれているのである。過去を受けとめ、願うべき未来が明らかであるからこそ、現在の選択が可能となる。それが、生きるということの道理であるというのであろう。ところが現代は、いのちの帰すべきところを失うことによって、現在の生を問いつける原理を見失い、現在の選択は生きる者たちの都合に委ねられ、未来を失ってしまった。

親鸞聖人は『教行信証』信巻に、阿闍世の姿を一闍提（注2）の問題として課題にしている。その『涅槃経』の中で阿闍世は、「現在の樂を見て、未来の不善の苦果を見ず」と表されている。まさに未来を失ったものとして阿闍世の問題があることを教えらる。原発とその処分地を過疎地に押しつけたまま「風景」として眺め、自らの「豊かな」生活を守り続けようとしてきたこの国のあり方と、そしてそこに生きる私たちこそが、まさに「未来を失った」阿闍世なるものだと示されているのだらう。そして未